

博士学位論文（要約）

日本語教育における「は」と「が」の指導に関する研究 —中国語母語話者日本語学習者の誤用を手掛かりに—

肥田 葉奈

日本語教育において、「は」と「が」は一般的に「主語」や「主題」のマーカースとされており、習得が困難な学習項目のひとつとされている。そこで本研究では、「は」と「が」の問題を解決する方法を文法用語の観点から検討し、その上で「は」と「が」の誤用分析を行うことで、指導法の再考と再構築を行うことを目的とする。

研究手順は以下の通りである。

- ①日本語教育における「は」と「が」の指導基盤を概観し問題点を明らかにする。
- ②従来の「は」と「が」の研究を文法用語の観点から再整理し、問題点を明らかにする。
- ③誤用分析を通して「は」と「が」の機能を明らかにする。
- ④日本語教育における「は」と「が」の指導手順を提案する。

以上の手順で考察した結果、明らかになった点は以下の通りである。

- ①日本語教育での「は」と「が」の指導では、「主語」「主題」「主格」「主体」という術語を基盤として指導が行われているということ。言い換えれば、「は」と「が」の基本的機能は「文法機能」であるということが前提となっているということ。
- ②「主語」「主題」「主格」「主体」といった文法的な術語は、「は」と「が」と一対一の関係ではなく、さらに術語の定義に関しても先行研究において見解の一致が見られていないこと。
- ③「は」と「が」の基本的機能は「言外の意味」を付与する機能であること。そのうち、「は」は「選択指定」、「が」は「焦点特化」の機能を軸とすること。
- ④日本語教育における「は」と「が」の指導手順として以下の手順を提案する。
 - [1] 助詞について指導する前に、まず「述語の特性」に基づき、その文において必要な意味役割が決定するということを提示する。
 - [2] 「述語の特性」とそれに付随する意味役割が共通している用例を提示し、「述語の特性」の分類ごとに、「述語」と意味役割との関係性を考察させる。
 - [3] 「選択指定」や「焦点特化」といった「言外の意味」について、それぞれ用例を提示しながら説明を行い、「は」と「が」の基本的機能が「言外の意味」を付与する機能であるということを提示する。
 - [4] 従来「文法機能」とされてきた点に関しては、それぞれの「述語の特性」に基づいた分類において、よく用いられるパターンとして「は」と「が」の使い方を提示する。つまり、取り立てて「有標」的な言い回しになることを避けたい場合は、その一般的に用いられやすいパターンを使用するという方法を提示する。